

巻 頭 言

愛知県小児科医会副会長
平谷 良樹

少子化が叫ばれて久しい。特殊合計出生率が昭和41年の丙午の1.58を割り込んだのは平成元年で、平成17年は過去最低を更新し1.25となり、生まれた子どもは百六万人。同じ数の子どもが生まれた年は遙か昔の明治19年（1886年）。この時の総人口は四千万足らず（日経2006年8月2日）。総人口が今の半分以下の時代と同じ現象が起きている。現在少子化は大きな社会問題となり、政府はその後少子化対策としてエンゼルプラン、新エンゼルプラン、少子化対策プラスワンなどを発表してきたが、ことごとく失敗に終わっている。植物は過栄養になると、実を結ばないと言う。生物である人間日本人も今豊かな生活を謳歌し、この大自然の原理に沿った現象であろうか。しかし、人間には英知があるはずである。今までの政府の取った政策は机上の戯言でしかない。いくら美辞麗句を並べても何の効力も発揮できない事をこの現実が物語っている。具体策を出す事だ。政権が変わり、小出しの政策ではなく、思い切った対応を期待したい。

少子化対策の一つとして確実に成果が上がる可能性がある。それは生めや増やせやではなく、せっかく生まれてきた子ども達の命をもっと大切することである。守ることである。無駄な子どもの死が多すぎる。その予防対策としてすぐ思いつくだけでも3つある。

一つ目は予防接種を拡充すること。日本の予防接種制度は諸外国、特にアメリカに比べ極めて劣っている。小泉内閣はあれほど政治、経済、防衛でアメリカに追従し国費をアメリカのために費やしてきたのにどうしてアメリカの優れた予防接種制度は取り入れないのだろうか。日本の制度は回数（平成18年になってやっと麻疹、風しんが2回になったが）、種類ではか

なり見劣りがする。また最近じりじりと接種の機会が狭められてきている。今やほとんどの国で行われているインフルエンザ菌b型に対するHibワクチンが未だに導入されていない。今年の1月にやっと使用の認可が下りたようだが、市場に出回るにはまだ時間がかかりそうだし、定期接種に組み込まれるのは何年先の事だろうか。現在アジア地区で出来ないのは日本と北朝鮮だけだと言う。このワクチンの導入でどれだけ命が毎年救われ、また不幸な人生を送らなくて済むであろうか。肺炎球菌ワクチンも出来ない。すでにアメリカではこの予防接種によって小児および成人の疾患予防に貢献しているそう。これらのワクチンが早期に導入されれば、化膿性髄膜炎が駆逐され小児科医の診療にも計り知れない安心をもたらす事であろう。狂牛病では日本政府は牛に対して全頭検査を主張した。その政府がどうして人間子どもたちに対して必要な全ての予防接種を全員にと強力に主張できないのか。水痘、ムンプス、B型肝炎なども全て定期接種とし、公費で行うべきである。

二つ目は子どもを車の中に置き去りにさせないこと。毎年繰り返される車の中の熱中症による死亡事件。子どもだけを車に残し離れたら犯罪として取り締まる。アメリカでは既に行われている。またチャイルドシートの装着率は未だに半分以下、これを100パーセントに引き上げる為の援助をすること。最近行われた一発駐車違反取り締まりは税金を殖やすつもりだろうが、命を守る方が先であろう。

三つ目は虐待死を防ぐこと。毎度聞き飽きている児童相談所のせりふに『以前察知していたが、そんなに深刻とは考えていなかった』。これは児童相談所の職員が足りないのだ。もっと増員し、すばやく介入して被虐待児を守るべきである。

以上三つの事に国費を投入する事に誰が反対しようか。この対策こそ効果的な少子化対策である。とにかく思い切った政策を子どもたちのために実行することである。「美しい国」はここから始まる。